



対談「やっぱりインドは面白い！」

対談：勝池 和夫 氏、岡本 和久

レポーター：佐藤 安彦

勝池 和夫氏 プロフィール

1978年新日本証券に入社。国内支店で営業を経験後、国際調査室、シドニー事務所などで海外投資家への日本株式のプロモーションに携わる。1994年からは太陽投信の香港拠点で中国株投信の運用を担当。その後、AIG投信を経て、2003年コンサルティング・アジア社を設立、中国ビジネスを中心としたコンサルティングを行う。2006年新光投信（現アセットマネジメント One）に入社。中国、東南アジア、インド市場などへ投資する株式投資信託の企画と販売促進に注力する。2016年からはインドのTATAアセットマネジメント社の日本でのアドバイザーとなる。米国の南カリフォルニア大学経営大学院からMBAを取得。（写真はTATAモーターズの「ナノ」に試乗した時のもの）

岡本：最近インドに行かれたのはいつ頃ですか？

勝池：今年の2月24日から3月1日です。今回はムンバイ、バンガロール、ニューデリーの3都市で、インフラ関連、小売、銀行、自動車の4社の上場企業と、未上場のスタートアップ企業も4社行きました。eBayのようなオークションサイトの会社と、Uberのような配車サービスの会社、Amazonのような電子商取引企業、そして保険商品の比較サイトを運営する会社です。



岡本：タタの方はどうですか？

勝池：はい。私はタタアセットのアドバイザーをしているので、インドの投資家の動きも聞いてきました。インドでは、個人のお金が積立プランを通じてかなり投資信託入ってきていますね。

岡本：そうみたいです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

勝池: 株式市場の上下に関わらず入ってきているというので、非常に驚いています。

岡本: 日本とはずいぶん違う。

勝池: そうなんです。まさに「Leapfrog」、つまり蛙飛び、馬跳びの勢いで、個人の資金が投資に向かっています。インドでは電話の普及が、固定電話をあまり経由しないで、いきなり携帯電話の世界に広がって行った。同じように個人の資産運用が、投機の時代を飛ばして、いきなり投資の時代に入っているという感じです。

岡本: なるほど。投機の体験をせずに投資に行ったのですね。

勝池: 日本には長い間投機の時代がありましたよね。70年代後半から80年代も投資というよりは投機でした。油が出る、金が見つかる、癌が治るなどです。こういう投機的な話で手数料稼ぎをしていましたから。投資が出てきたのは、何十年も後なんです。

岡本: 確かにそうですね。

勝池: それがインドでは、投資信託は既にノーロード中心ですし、インド政府の規制当局も投資教育を行い、投信を広く普及させるように業界を指導しています。

岡本: 商品はどんなものがあるのですか？

勝池: 個人が毎月を中心に積み立て投資を行っている口座の8割以上が株式投信ですね。インド経済はこれから大きな発展が期待されるので、セクター毎のアロケーションだとかテーマ型だとかよりも、もっとシンプルな株式ファンドですね。それと女性の投資家も増えているみたいです。タタアセットのスタッフがインドの地方を訪問した時、普通の家庭の女性がバリュエーション(投資価値)という言葉を使っていたという話を聞いて驚きましたよ。現在のインドの一人当たりの経済規模は日本の1970年頃と同じですが、今から40年以上前の日本の地方でそんなことを言う人はいませんでしたからね。インドでは、地方にまで投資教育が浸透してきていると思います。

岡本: すごいですね。日本は、当時はもちろん、今だって話に出るのはチャートの話ばかり(笑)。

勝池: インドの投資教育はひょっとしたら世界で最も進んでいるかもしれません。来年は農村部にも行って、どういう状況になっているのか調べてみようと思っています。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本: 口座の開設状況などはどうなっているのですか？

勝池: 今年の2月末時点で、SIP(システマティック・インベストメント・プラン)の口座数、いわゆる積み立て口座は2,590万口座になっていて、毎月1,000億円から1,300億円ずつ個人の資金が入っています。やはり、相場というよりもインド経済の成長が背景にあるのだと思います。それにしても、一年定期の金利が7%近くあるのに、株式投信がそんなに人気を呼んでいるなんて、インドでは個人の資産運用に大きな変化が起きています。

岡本: その点は日本と真逆な状況ですね。勝池さんからいただいた「シンプル教授の投資をやさしく」という一般向けのマンガ、とてもよくできていると思います。自分の将来のために投資が必要なが感じられる構成ですね。

勝池: そうなんです。あれは私が投資教育の参考のために日本語訳をつけたものです。元々は英語、ヒンディー語など確か7つの言語版が3年前に朝刊と一緒にインドの680万世帯に配布されています。将来のために積み立て投資を奨励する内容です。





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本: 日本は相場が良さそうでも、経済全体が伸び悩んでいる現実があるので、投資家が強気になれないという部分がありますよね。インドは逆に、相場はいろいろあるけど、経済全体が伸びているから「まあいいだろう」、そういう楽観的なものが支配していますね。ところで、積み立てている目的は何でしょう。

勝池: はい、将来であれば、例えば、1つは娘の結婚式、1つは教育資金、あとは老後のお金ですね。

岡本: 結婚資金は親が用意するんですね。

勝池: そうみたいです。インドでは伝統的に結婚式の費用は新婦の親が負担してきましたので、娘を持つ親は資産運用に真剣なようです。また、インド人は、昔は資産の中に金や宝石など不動産を多く持っていました。インドでも銀行口座が普通に開設できるようになってきて変わってきました。かつては電気もトイレもないし、道路もない状態でしたから、銀行の口座なんてあるわけないですよ。自分を証明するものがないのですから。それが、12桁のマイナンバーのようなものができて、それで銀行口座を作れるようになって、そこから積み立て投資しているのです。

岡本: 近くに銀行の店舗がなくてもスマホがあれば、ネットバンキングできますものね。急速に貨幣経済とネット経済が同時進行している感じですね。

勝池: 今回、ムンバイでインド最大手の小売企業を訪問しました。この会社、つい最近、セブンイレブンと提携をしたので、今年ムンバイにセブンイレブンがオープンする見込みです。衣食住の衣でいうと、伝統的なサリーではなく、西洋のモダンな服装に人気が出てきています。ZARAも入っていますし、H&Mも2017年10月に進出して4時間待ちの行列ができたそうです。今年は、いよいよユニクロがニューデリーに店舗オープンするってことで、人の採用を急いでいるようです。

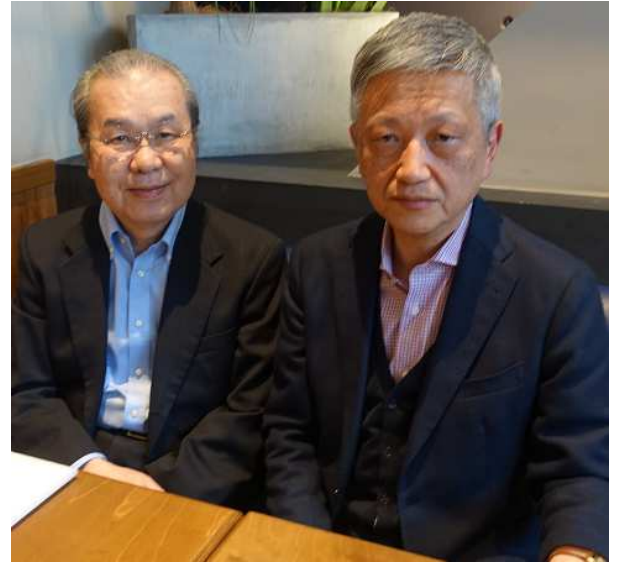
マーケティングのトップはインド人がするみたいです。伝統的なサリーは残っていますが、段々と衣が変わりつつありますね。また、食もインドではカレーのイメージが一般的ですが、ピザやパスタはもはやメインストリームだと言っていました。中国料理も人気です。日本料理店も増加中で、更にはメキシコ料理も出始めたみたいです。最近のヒット商品は、わさび味のクッキーとのことでした。インド人はカレーばかり食べているのではなく、わさび味も人気になるほど若者中心に食が多様化しています。そのわさびクッキーをお土産にしようと思ったのですが、広いインドの東の方で流行っているらしく、西のムンバイでは売ってなかったですね。残念でした。

岡本: そうなんですね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

勝池:今のインドの一人当たり GDP は 2,000 ドルですから、日本でカップヌードルが発売された 1971 年頃と一緒です。まさにこれからインドの消費市場はかなりの勢いで広がっていくと予想されます。衣は ZARA、H&M、ユニクロが行って、食はセブンイレブンも出た。住では昨年スウェーデン発の家具量販店 IKEA がハイデラバードでオープンしていますね。派手な色使いの伝統的な家具より、シンプルなインテリアが好まれるようになっていきます。ファーストリテイリングは、インド市場を日本、中国に次ぐ「第三の矢」として注目しています。日本のコンビニも国内が飽和状態ですので、急速に都市化が進みサービス業の成長余地が大きいインドに活路を見出すのは当然でしょう。



岡本:一般の人たちの生活は良くなってきていますか？

勝池:はい。良くなっています。今回ムンバイまでの飛行機で隣になった、日本の工作機械メーカーの人から話を聞けましたが、10 年ほど前と比べて変わったインドの印象は、まず道路が良くなったことです。これはスズキの現地子会社のマルチスズキの方も同じ事を言っていて、初めて車を買う人が、地方に増えてきたとのことでした。これは良い道路の範囲が広がっているということなんですね。インフラ関連の会社の役員も、これから先は高速道路と地下鉄の建設が最も有望だと言っていました。

2 つ目は、停電が少なくなったことです。工作機械を納める時に、昔は補助電源も付けてくれと頼まれたのですが、最近は言われなくなったそうです。3 つ目は、安全に気を遣うようになってきたことです。多分インド全体で、程度の差はあるものの、インフラ整備の進展、衣食住の多様化などと合わせて、生活の質が向上しているのでしょう。

岡本:15 年ほど前、アメリカ人のファンドマネージャーで、インドに対してすごく強気な人がいましてね、その方も同じことを言っていました。現地で会議をしていると 1 時間で何度も停電するし、道路事情が悪いし冷凍設備もないから食料品が途中で腐ってしまう。これがそのうちに解消されるはずだからすごいぞと言っていましたよ。きっと相当、儲けたでしょうね(笑)。

勝池:そうですね。インドに行った人の話を聞くと、汚いとか遅れているとか渋滞が酷いとか言われて、好き嫌いが分かれるんですけどね。投資家の目線で見ると、何でもかんでも整って綺麗で便利になっちゃうと面白くないんですよね。インドは日本人には決して住みやすい所ではないけれど、資産を育



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

てる所としては、日本の投資家にとって魅力がありますよね。「人生 100 年時代」に向けた長期的な資産形成における、とても有効な選択肢の一つだと思います。カップヌードルが発売された 1971 年頃の日本の人口は 1 億 500 万人位でした。平均年齢は 31 歳位。日経平均は 2 千円台で、1ドル 360 円だったと記憶しています。インドの現在の人口は 13 億人を超えています。平均年齢は 28 歳位です。これからが楽しみです。

岡本:そうですね。インドの皆さんが一生懸命働いて、我々が投資したお金を大きく育ててくれているようなものですからね。

勝池:最近、NHK の番組でやっていましたけど、マルチスズキとイセ食品という日本で鶏卵最大手の会社がタイアップして、インドで卵の製造販売を始めるそうなんです。スズキが運ぶらしいのですが、やはり道路が良くなって電気があって冷蔵庫がある環境が、結構、奥地まで広がっているという証だと思います。また、所得水準も向上しているため、高いけれど安心・安全な日本の卵への需要が出てきているようですね。

岡本:教育に関してはいかがでしょうか。インドの方は頭が良くて、特に数学が得意というイメージがありますが、何か大きな変化はありますか？

勝池:今回、インドのシリコンバレーと呼ばれているバンガロールに行きました。1 年くらい前ですが、バンガロールでソニーのソフトウェアの会社の社長をしていた方が「インドシフト」という本を書きました。その本に、日本企業はシリコンバレーを目指し、シリコンバレー企業はインドを目指すとあったので、この「インドシフト」の動きは本当かなと思っていたんです。そしてバンガロールで、あるスタートアップの幹部に聞いてみたら、まさにその通りなんです。一つの例として教えてくれたのですが、現在、IBM の世界の従業員の 40% がインドの一つの都市にいるそうです。それはバンガロールではなく、プネというムンバイから東に車で 2 時間半くらいの都市です。IBM は AI に関連した特許の出願件数が 2016~18 年の 3 年間に 3000 件で、民間企業ランキングで世界一なんですね。2 番目はマイクロソフトで、3 番目はグーグルです。AI の特許出願件数が世界一の IBM の従業員の 40% がインドの一つの都市にいるって、これ凄いことですよね。まさに「インドシフト」が起きています。尚且つ、IBM の社長はロメティという女性ですが、彼女は「今後 3 年間で、インドの女学生 100 万人を教育する」と言っているんです。

岡本:それは社員としてではなくですか？

勝池:社員としてではありません。IBM が、インドの中央と地方政府に協力して女学生の STEM (科学、技術、工学、数学)分野でのスキルアップを支援するということです。将来的にはジョブ・オポチュニ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ティーを生むことにもなると思います。インドは男尊女卑のイメージが強いので、女性が男性の影に隠れがちですが、磨けば光るんだということですね。やはり頭が良いのだと思います。女性の社会進出はこれからかなり急速に進んでいくと思います。教育面で言うと、これが変わってきた点ですね。トイレもちゃんと出来てきました。

岡本: 今までなかったのですか？

勝池: あったのですが、数が全く足りないし、すごく汚かったんです。特に地方では。

今までの話をまとめると、インドは世界に追いついていく13億人の巨大市場と、AIを中心とした先端技術で世界を引っ張る人材を大量に持っているということです。「市場と人材」ですね。非常に成長の可能性は大きいですね。インド国内では、そのインド経済の成長の果実を、規制当局と投信協会と運用会社が協力し合って、国民が広く享受できるように政策を施しています。残念ながら、日本の状況はこれとは正反対で、予想されるのは少子高齢化で縮小する市場と、成長には欠かせないAI人材の不足です。果実は大きくなりそうもありません。

岡本: そうなんですね。

勝池: ちなみに、AI特許出願件数で2位と3位のマイクロソフトとグーグルの社長はインド人です。サティア・ナデラとサンダー・ピチャイです。昨年のアメリカ企業のCEOのランキングでは、1位がナデラで、3位がピチャイでした。これまで長くアメリカの経済、株式市場を牽引してきたハイテク企業のトップの多くがインド人だったことを忘れてはいけません。

岡本: パキスタンとの紛争問題についてはどうお考えですか？

勝池: 2月26日の朝に、インドがパキスタンを空爆しました。これは、2月の中旬にパキスタンのゲリラにインドの警官が40人殺害されるという事件があって、その報復として40数年振りにインド空軍が、パキスタンのゲリラがいるバラコットという都市を攻撃したんですね。その後2日間くらいはインド通貨も安くなって株価も下がりましたね。しかし、また直ぐその後でモディ首相の人気高まりました。パキスタンに対し強い姿勢をとったことで、リーダーシップが評価され信頼が回復したんですね。それまでは、現地の証券会社もモディ首相の再選に弱気でした。人気落ちてきて景気も減速していて5月に開票される選挙でも負けるかもしれないと思っていた。負けると改革が頓挫するのではないかと心配していました。しかし、パキスタンへの空爆で、状況は一変しました。株価も急回復しました。

印パの紛争は独立以来ずっと続いているのですが、今回はパキスタンも、捕まえたインド人パイロットをすぐにインド側に引き渡したりしています。おそらく中国からの助言があったんだと思うんですけど



長期投資仲間通信「インベストライフ」

どね。3月になってからは海外投資家が凄い勢いでインドの株式を買っていますよ。現状は政権与党に有利な状況になっていますね。中国は国家プロジェクトとして一带一路を進めていて、アメリカとはいろいろと貿易戦争をしていますが、インドとの関係悪化は望んでいないはずですよ。中国はその一带一路の生命線である中国のカシュガルからバラコッタ辺りを通してパキスタンの港まで繋がる経済回廊をどうしても完成させなくてはならない。ですからインドとパキスタンの間の緊張を長引かせたくなかったのだと思います。また、中国とアメリカの関係が悪化していることは、中国とインドの関係を良好にさせるのではないかと思います。パキスタンは中国の影響下にありますから、パキスタンとインドの関係も大きく悪化することは考えにくいと思います。

岡本:なるほどね。話題が変わりますが、中国の景気はどうなんでしょうか？

勝池:中国経済は間違いなくスローダウンしていますね。

岡本:スローダウンと言っても、かなり高いところからの、ということだとは思いますが。

勝池:そうなんです。IMFは年に4回世界経済見通しを発表しています。直近のものによると、今年、来年で見た場合、世界経済は3.5%くらいの成長なんですよ。これを自動車に例えると、世界車は時速35キロで走っていることになります。国別ではアメリカ車のスピードは、今年は20キロ台で、来年は10キロ台に落ちると予想されています。どんなに頑張っても、トランプであろうと誰であろうと30キロ(3%成長)なんて出ないんですよ。ヨーロッパはどうかと言うと、イギリスはブレグジットで揉めています。フランスもマクロンさんの政権運営が難しい状態で、全体で中長期に見ても10~20キロくらいのスピードなんですよ。

日本車のスピードは、今年は10キロ出るかどうかで、来年は増税のブレーキも効いてもっと減速しそうです。まあ、ほとんど路肩に停まっているみたいなものなんですよ。どう見ても先進国の経済は成長余力に欠けますし、リセッションとは行かないまでも、35キロなんて出ないんですよ。

では中国車はどうかというと、ずっと改革開放以来30年以上も100キロ近いスピードで走ってきたんですよ。ですから減速しても何の不思議もありません。むしろこれからは環境に優しく安全に走ってもらいたいくらいです。今の60キロ程度の安定走行が丁度よい。これは中国政府も認めています。それでも、他の国より遥かに高いスピードなんですよ。

岡本:そうですね。しかも、あの規模でそのスピードが出ているんですよ。

勝池:はい。そうなんです。中国のセミナーにはいろいろ出ていますが、誰もこんなことを言っていませんでしたよね。2000年に「2020年の中国」って本がありましたけど、世界で2番目の経済大国になるとか日本の3倍の経済規模になるなんて、誰も予想していませんよ。ましてや自動車の年間販



長期投資仲間通信「インベストライフ」

売台数が2,000万台を超えるなんて思ってなかった。せいぜい500万台くらいだと思っていたんだから、遥かに間違えましたよね。ブレグジットもトランプさんが大統領になることもほとんど予想していませんでしたけど、中国経済に対する見方ほど間違っただけのものはないですね。

話を戻しまして、インド経済についての先ほどの車のスピードに喩えると、現在は約70キロ(7%成長)のスピードで走行しています。既に世界最速の車なのですが、目先はともかくこれからは中長期的に徐々に加速していくと個人的には予想しています。そして、その高速走行は相当長い間続くと考えられます。車が走る道路も車の性能も良くなるでしょうね。そのような大きな可能性を秘めた国は、現在の先進国やインド以外の新興国には見当たりません。ですので私は「やっぱり、インドは面白い！」と思います。

岡本: 中国の習近平体制は続いていくと思いますか。

勝池: 私が今見ているのは、中国経済でいえば、香港とグレーターベイエリアなんですね。何故かという、去年、高速鉄道がカオルーン(九龍)の西駅まで繋がったんですよ。今までは深センまででした。それが、北京からずっと来てやっと香港まで繋がったんです。ほとんど同時期に、香港からランタオ島を経由して大橋がマカオと珠海(ジュハイ)まで繋がりました。これで、香港と広東省とマカオを一体化してみると、8000万人の人口で、経済規模が120~130兆円になるらしく、中国は経済をこのグレーターベイエリアから再度盛り上げていこうと考えていると思います。そこにはこれからの中国経済を担う、ハイテク、通信、金融、交通、エンターテインメントなどのインフラが集結しています。中国経済の発展は元々南から始まっているので、このエリア構想の進展には注目しています。習近平体制の未来は、一帯一路と、このグレーターベイエリア構想の二つの国家プロジェクトの成否に懸かっていると思います。

岡本: 中国っていろんなことを言われていますけど、何か着々と地位を築いているなと感じるし、最近では世界のリーダーであることを意識した発言も増えていますよね。

勝池: 中国のことを嫌っている人は多いですからね、何か問題が起きると、それ見たことかと言う人は多いんですよ。でもね、冷静に考えてみると、米中で貿易戦争だとかイハイテク戦争をし、経済も減速していますが、中国では災い転じて福となるケースもあるんですよ。例えば、リーマン・ショックの時もそうでしたが、経済のサービス化が進展したことや、台湾との関係が改善したことなど、災いが福となることもあるのだと思います。今回も、中国政府の規制が緩和されて企業には追い風になる分野もあるかと思います。中国と日本との関係も改善していくかもしれません。中国とインドの関係も同様です。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本:ここで話をインドの金銭教育のことに戻したいのですが、規制当局はどんなことを考えて、どのように進めようとしているのですか？

勝池:一度で買うのではなくて、ドルコスト平均法を参考にしながら、長期的な視野で積立投資をしてほしいということで、目的を持って続けてもらうようにコストが高くならないようにしていますね。そして、大都市部だけじゃなくて、地方の小さな都市にも投資教育が行き届くようにしています。

岡本:投信会社はたくさんあるのですか。

勝池:あります。40社くらいはありますよ。

岡本:タタグループもやっていますね。

勝池:はい。そうですね。2月末の数字を見ると、投資信託業界全体の残高は37兆円くらいまでいっています。10年前は8兆円だったので、この10年の間に4~5倍になっていますね。これから先はわかりませんが、まだまだ貴金属や不動産の部分も残っていますが、インフレがそれほど激しいわけではないので、投資家は徐々に資産配分を実物資産から金融資産にシフトしていくと思いますね。人々の生活のレベルがどんどん上がっていて、生活自体が変わってくる。そういう実感があるので希望を持っていますよね。将来が開けている感じある。街を歩いている人の顔も前より明るくなった気がします。スタートアップ企業に行けば、多くの若者がいて、そこに世界からの資金が集まってきています。

岡本:インドの家庭の中に、昔、日本で急速に普及した三種の神器みたいなものは広がっているのですか？

勝池:冷蔵庫が広がり始めていますね。日本では1960年代だったと思いますが、冷蔵庫が一般家庭に普及し始めて、そのあとにビールが伸びたのですが、インドも同じです。去年と一昨年、2年連続でビールの消費が二桁増になったらしいです。これはあまりないことみたいですね。今ではすべての村まで電気が通ったので、冷蔵庫を持つ人も増えてきてビールやコーラを冷やすようになったのでしょうね。その状況を受けて、柿の種の亀田がインドに進出しました。結構人気があるみたいで、やはりかつての日本と同じことが起きているといった様子ですね。日本の家庭用エアコンの売れ行きも好調です。

岡本:電気も村まで電線は引かれているということなので、全ての家庭に行くのは時間の問題でしょうね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

勝池: そうだと思います。日本も東京オリンピックの時は、電気は各家庭に引かれていたけれど、テレビやトイレなどを考えれば、今のインドと同じような状況ですよ。この写真はインドを夜間に衛星から撮ったものです。政府系の研究所が提供していますが、左は2012年1月で、真ん中は2016年12月、右はその間の変化を示しています。ご覧のようにインドでは、家庭の電化と電力利用が急速に進んでいます。現在のインドは更に明るくなっています。



2012年1月



2016年12月



2012～2016年の変化

岡本: そうですね。みんなすっかり忘れてしまっていますけど。それで、インドのリスクというと何がありますか？

勝池: リスクは、まずは原油価格の高騰でしょうね。インドは80%以上の原油を輸入に依存しているので、原油価格が上がるとインフレが起きて金利が上がったり、貿易赤字が増えたりすることになりますね。あとは、国境紛争が大きいですね。先ほど言ったインドとパキスタンと、あともう一つ、インドと中国ですね。ただ、私は個人的には、比較的印パ、印中の関係を楽観的に見えています。また、5月23日に開票になる総選挙の結果も、まだ油断はできませんね。もし、モディさんが負ければ市場は短期的には動揺するはずですが、昨年大きな株価の調整の引き金になった銀行の不良債権問題は峠を越したようです。

岡本: そうなんですね。

勝池: (地図を見ながら) ムンバイがここで、デカン高原があって、その先にバンガロールがあります。ここが首都ニューデリーです。貧しい地域もあるんですね。インドって陸の孤島みたいな国なんですよ。北はヒマラヤで、西はアラビア海がある。東はベンガル湾。昔、三蔵法師がインドに行った時に



長期投資仲間通信「インベストライフ」

は、ぐる〜と回ってここカイバル峠を通って行くしかなかったんです。だからインドって、すごく世界と隔絶していたんですね。中央にも日本の国土の何倍もあるデカン高原があって、その両側にはガーツという山脈があって動きづらいんです。そこにマハラジャが 550 人位いて、それぞれの領地を支配していた。そこにイギリスがやってきて、マハラジャを通じてインドの分割統治を始めた。だから鉄道レールの幅もバラバラだったんですね。このバラバラという点では、中国は一党独裁と言われていますが、インドは 2014 年の総選挙の時に調べた人がいて、細かく分類すると政党が 1653 あったみたいです(笑)。

岡本:それをまとめるっていうのは大変ですね。

勝池:そうなんです。だけどまとまりつつあるのが、今のインドですね。

岡本:同じ悩みは中国も抱えている部分がありますよね。

勝池:そうですね。でも、共産党が力を持っているので、「どけ」と言えばどくので、インフラ工事は楽ですね。インドはそれができないのでインフラ工事は遅くなりますよね。モディ首相が言うには、2017 年に物品・サービス税が導入される前のインドには間接税の類が約 500 あったらしいです。州を超えるのにも税金が掛かるので、インフラ不足と相まってインドの物流はスムーズでなかったんです。それが新税の導入で大きく改善しました。更にソフトバンクがインドの物流企業に 500 億円投資するという話も出てきていて、いよいよ物も横に動き出すような感じです。

岡本:すごいですね。

勝池:あとは憲法ですね。日本もインドも憲法が施行されて約 70 年です。日本の憲法は英文にすると約 5,000 字でできているらしいのですが、インドの憲法を英文にすると、146000 字になるらしいです。さらに、日本の憲法は今まで一度も改正されていませんが、インドは 100 回以上改正されています。つまりどういうことかということ、インドは複雑で、且つ、しょっちゅう物事が変わっているってことなんですよね。

岡本:それは現実的だっって見方もありますね。これもダメあれもダメだから変えていこうってことかもしれないですね。日本はそうではなく、うまく行った経験があると中々変えようとしないところがあって、そこは大きな問題ですよ。逆に、日本に今から急にインドみたいになれって言っても無理なんですけど、やはりインドのバイタリティを企業経営や政策に取り込んでもらいたいし、個人としてはインド株を買ってみるといこともやってみればよいということですね。今日はどうもありがとうございました。大変面白かったです。